
手紙～最愛の君へ～

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙〜最愛の君へ〜

【Nコード】

N5101M

【作者名】

蒼

【あらすじ】

最愛の君に贈る、僕の気持ち。

でも君には既に未来を誓った恋人がいた。

1・君の隣

今日は君の誕生日。

たくさんの人に囲まれて、君は幸せそうに笑っていた。

ねえ、

ずっと君に言いたかったことがあるんだ。

君が好きなんだって。

だけど、

それは言葉に出来ないから、

君に伝えられないね。

でも、

なんとなくわかるんだ。

今この言葉を伝えないと、

僕は一生後悔するんだって。

でもね、

多分伝えられないんだ。

だって、

君が好きだから。

なんでだろうね、

いつから君を追いかけたのかな。

君はすでに、

違う人と並んでいたのに。

僕に向けてくれる言葉が、

僕に向けてくれる笑顔が、

嬉しかったからかな。

君が泣いているときは、

僕も胸が裂けそうなほど、

泣きたかったよ。

君を抱きしめて、

慰めたかったよ。

でもね、

君が仲直りして、

笑顔に戻った時は、

嬉しかったけど、

泣きたくなかったよ。

けどね、

やっぱり君には笑顔が似合うから、

僕も笑えたよ。

君の言葉一つ一つが、

僕の宝物だったよ。

これからも、ずっとそうだよ。

君は時々、

辛いのを我慢して笑っているから、

心配だったよ。

本当は泣きたいのに、

無理して笑っているから、

心配だったよ。

いつかの別れ際、

君にそう伝えたら、

それはこっちのセリフ。

と言われた。

僕が辛いのが、伝わっていたのだろうか。

何かあったら、自分になんでも話してごらん。

なんて、大人ぶった調子で言う君。

何も知らないのにね。

君に相談なんてできないよ。

可笑しくなつて僕が笑えば、

君は頬を膨らませた。

そこがまた可愛い。

また明日ね、

と言う君の言葉を聞く度、

また君と会える。

という喜びを噛みしめていたよ。

また明日も生きようと思えた。

君が、僕の生きる糧でした。

2・君の笑顔

君と初めて話したのは、いつだったかな。

多分、

桜が綺麗に咲いていた、

あの日だったかな。

ぼんやりと通路を歩く僕に、

君はとびきりの笑顔で、話しかけてくれたね。

周りから人気で騒がれていた君が、

まさか僕に話を掛けるなんて

思ってもいなかったけど。

無邪気な笑顔と、

時折見せる真剣な顔。

どちらの君も、

とても可愛いと思えた。

たまに抜けている時もあるけれど、

好きな人のために一生懸命で、

友達のためにも一生懸命で、

そんな君の力になれたらと、

ずっと思っていたよ。

僕は君の一番の友達という立ち位置で、

不満なんてなかった。

だけど、

一番辛かったかな。

恋人を紹介したい。

そう言われたのは、知り合ってそう遅くない時期だった。

初めまして。

そう言って笑いかけてきた相手に、

僕も笑顔を返した。

いつも仲良くしてくれてるみたいでありがとう。

いえ、こちらこそ。

交わされた挨拶。

そこから広がっていく会話。

僕が終始笑顔でいられたのは、

多分君が幸せそうに笑っていたから。

君の選んだ人は、

とても素敵な人だった。

それからよく、3人で会った。

意外に話が合い、楽しかった。

でも、

同時に辛かった。

とても僕は、

辛かった。

君が、笑っていたから。

違う人の隣で、笑っていたから。

君達が別れればいい、

そんなことを僕は思ったことがある。

でもそれは、

君が悲しむから。

とても君が、

悲しむから。

だから、そんなこと願えない。

どうか君は、幸せに笑っていて。

ただそれだけを願う。

僕では、

君を幸せにはできないだろうから。

3・君の涙

君の涙を初めて見たのは、

暗い雲と、降り続く強い雨の中だった。

君は傘もささず、ずぶ濡れで、

そこに笑顔はなく、

瞳に生気もなかった。

空虚な目。

真っ青な顔。

ただそこに、立ち尽くしている。

僕は君に駆け寄って、

どうしたんだと言いながら、

両肩を掴んだ。

君は瞬きひとつせず、

僕をぼんやりと見上げたただけだった。

ただならぬ様子の君。

僕は君を呼び続けた。

しばらくして、君は反応を示した。

はっと我に返ったように、

困ったように苦笑いして、

ごめん。

と言った。

ごめん、もう大丈夫だから。

そう言って笑う君。

全然、大丈夫なようには見えなかった。

だって、頬が濡れているのは、

雨のせいだけではないのだから。

恋人と何かあつたらしい。

詳しくは、聞かなかつたけれど。

聞けなかつたけれど。

多分、この時だろう。

僕が初めて、君たちが別れればいいのに、

と思ったのは。

好きな人の傍にいて、君が辛いなら、

僕の傍に来てほしいと。

願って、しまった。

そんな僕の心を知らぬまま、

どんなに辛くても離れたくない。

そう訴える君。

そっか。

と僕は微笑んで、

なら大丈夫だよ、頑張れ。

と言った。

雨は止み、雲は晴れた。

ありがとう。

そう言って歩き出す君。

いつもの笑顔が戻っていた。

また明日。

今度は僕が、自分から言ってみた。

君が答える。

うん、また明日。

君は本当に、あの人が好きなんだ。

でもね、

僕も本当に、君が好きなんだ。

一緒だね。

悲しくなる。

僕の心は、きっと晴れない。

4・君の幸せ

話がある。

そう呼び出されたのは、夏の日の昼下がり。

冷房のよく効いた、

おしゃれなカフェだった。

僕を呼びだした相手は

緊張した面持ちで、

僕を見つめる。

何度か会話をしたことがある相手だった。

話も合い、落ち着いた雰囲気の人。

正直、僕は驚いた。

相手は違う人に思いを寄せていると思っていたから。

まさか、僕が好きだなんて思わなかった。

好きな人がいる。

相手の気持ちに僕がそう答えると、

そっか。

と、

いつか僕が君にしたように、

相手が笑った。

ごめんね、ありがとう。

そう僕が言って、

その場を後にした。

相手は心優しい、

思いやりのある人だった。

僕とその人との噂を聞いた友人たちは、

口々に勿体ない!

と言っ て来た。

ある人には、

何が気に入らない。

とまで言われた。

不満なんてないよ。

ただ僕には勿体ないから。

そう答えると、

呆れたように溜息を吐かれた。

この話は、君にも届いていたらしい。

好きな人は誰だと聞かれたけれど、
適当に流した。

君に、言えるわけない。

協力すると、満面の笑みで言う君。

そんな君は、

先日の涙がなかったかのように、

恋人と並んで、幸せそうに笑っていた。

君には、言えない。

君に、言えるわけがない。

秘密だよ。

悪戯っぽく僕が言つと、

君はいつか僕に見せた、

拗ねた顔をする。

それでも僕は君には言えないから、

ごめんね。

とだけ言った。

すると君は慌てて両手を振る。

表情がコロコロ変わる君。

それが

可愛くて、

面白くて、

僕は悲しい気持ちを抑え込んで、

笑った。

君のために、笑った。

君は一生、気づかないだろうけど。

僕はそれでもいいと、

思えるから。

5・君の気持ち

わかっていたんだ、本当は。

いつか、こんな日がくるんじゃないかって。

だけど、僕はまだ

君の友人で、いられたから

だから、また涙を流す君の傍に、

いられたんだろうね。

人づてに聞いたらしい、

今自分の恋人は、

別の人と共にいると。

やっぱり、自分も付いていけばよかった。

なんて、僕にそう零す君。

僕が悪いのだろうか。

遠い土地へ、行かなければならない。

恋人に告げられた時、君は悩んでいたね。

僕に、どうしようかと

相談してくれたね。

だから僕は言ったんだ

たとえ離れていたとしても、

二人が想い会っていれば大丈夫だと。

あの時僕は、そう言わない方がよかったのかな。

でもこれは、本心なんだよ。

君とその人が、お互いに本気ならと

そう思ったんだよ。

気にしないで、自分のせいだから

君はそう言って、悲しそうに笑っていたね。

嘘、本当は

僕を責めたいくせに。

お前のせいだって、

お前があの時そう言ったから、

待つことにして、結局こうなったんだって。

責めてくれればいいのに、

そしたらきつと

君の気持ちは、

少しは晴れるでしょう？

だけど、知っていたんだ。

君が、あの人との関係に悩んでいることを。

自分とあの人は、釣り合わないって。

だから、僕なんかの言葉で

あの人についていくことを、やめたのでしょっつ？

やっぱり、こっとなっちゃったね。

なんて、君が笑う。

もっといい人、探そうかな？

そんなこと言ってるから、逃げられるんだよ。

最低だよね、君って。

でもそんな君を好きな僕は、

もっと、最低。

6・君の真実

君があの人と別れてから、

しばらく経った頃。

僕と君は、

確実に距離を縮めていったね。

こんなにいい人が近くにいて、

何で気付かなかったんだろう。

なんて、君は笑って僕に言った。

だから僕は、

僕はそんなにいい奴じゃないよ

と言った。

またまたあ、なんて

君が笑う。

僕の好きなあの笑顔で。

僕のことを、

君は好きだと言った。

だけど僕は

ありがとうと言ったきり、

君に正確な返事を返さなかったね。

それに君は不満げだったけれど、

僕が変わらず傍にいたから

特に返事を要求はしなかったね。

ある時君は、

僕とキスがしたいと言った。

僕はそれに答えなかった。

どうして、と君が言う。

泣きそうな声だった。

だから僕は言った。

君はあの人を忘れていないでしょう？

まだ好きなんでしょう？

あわよくばよりを戻したいって思っているでしょう、と。

そんな、と君は力なく言った。

そんなことない、と続けて

僕との距離を縮めると

道端であることも気にせず、

僕に口づける。

僕は、抵抗しなかった。

しばらくの間、そのままです。

僕はゆっくりと君を離した。

そして、僕は

君に後ろを向くように言っつ。

僕の言葉に従った君は、

茫然とそのまま

立ち尽くしていたね。

振り返ったそこに、

君が付き合っていたあの人がいたから。

昼間、

そう言えば今日、こっちに帰ってくるって。

と言った僕に

君は特に興味なさそうに返事をしていたね。

言葉すら発することができず、

ただただ立ち尽くす君。

ほら、やっぱり

まだ好きなんじゃないか。

ホント、君って調子がいいよね。

最低だよ。

好き、

と君がふいに発した言葉は

僕に向けられたものではなくて。

君の目の前のいるあの人が、

今までごめん

なんて言って、

君を

抱きしめた。

だから僕は、君の名前を呼んだ。

君は肩を小さく震わせて、

僕に振り返ったね。

ごめん、と君が開きかけた声をかき消すように
僕は告げた。

僕は初めから、

君を好きじゃない。

死にたくなるような、嘘だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5101m/>

手紙～最愛の君へ～

2010年10月11日23時44分発行